

第14部会

靖国をめぐる論議

——日本における政教分離概念をめぐる——

丹羽 泉

デュルケムおよびウェバーが、現在われわれが「世俗化」とよぶ近代市民社会秩序の持つ性格について、これを「聖性」の後退もしくは消滅、あるいは国家と教会の競合から教会の權威の撤退、という観点からではなく、社会そのものの秩序を可能にする非合理的な根拠地——絶対不可侵性——が、社会を構成する一要素たる個人という領域へと移行した現象という観点から捉えていることを指摘することは重要である。その不可侵性は、非人格的命題たる憲法へと移し変えられており、これが現に市民社会秩序において現実に作用し続けている支配力としてみる視点が開けてくる。と同時に、集合的なものへの聖性の付与という視点がもう一方に對置されていることも重要であろう。近代的市民社会秩序が成立して以降に登場した国民概念や臣民概念、あるいは民族概念や宗教概念もまた、個の聖性に對置されるところのコミユナリティな概念表象として捉えることが可能である。

紛争（顕在化したものであれ、潜在しているものであれ、）状態を捉える観点としては——とりわけ宗教社会学的な問題関心からいうならば——社会秩序の正当性の根拠地たる「不可侵の領域」に対する信仰の不一致、すなわち「聖なるものをめぐる闘

争」という価値緊張をこそが、捉えられる必要があるといえる。

ここで企図される研究射程は、一九世紀以降、全地球的規模で広がっている「近代」特有の市民社会秩序の波及とともに発生する「価値緊張」に着目することで、日本も含めた他地域との比較可能性に開かれたものである。「近代市民社会秩序」をヨーロッパ固有のものとして、非ヨーロッパ世界と對置させて用いるのではなく、まさしく当のヨーロッパ内部においても、きわめて鋭い価値緊張を生み出した契機として捉えるべきものであると考える。この場合、たとえばヨーロッパ、とりわけワイマール期を経てナチズムへと大きく振れたドイツなども視野においていることも付言したい。

以上の観点から、今回の報告では、靖国をめぐる論議をとりあげる。靖国をめぐることは、小泉前首相の参拝をめぐる、日韓、日中間において政治問題化したことが記憶に新しい。しかし中国政府による批判の論点と韓国政府による批判の論点は異なる。中国政府側から発せられた批判は、日本軍国主義の象徴たる戦犯が合祀されている靖国への首相の参拝が日中関係の基本原則の侵害とみなされる一方、韓国政府は首相による公的参拝が政教分離原則に反するとみなすところに力点がある。前者に對しては、いわゆる「分祀論」が提起され、後者に對しては、無宗教の国立追悼施設の建設という検討課題が浮上した。

戦後長きに亘り政権与党であり続けた自由民主党が追求し続けてきた靖国の姿は、安倍前政権に至って本格化した憲法改正論議の中で提示された自民党新憲法草案の政教分離規定に示さ

れた表現の中にみることができる。ここには、明治期における国家祭祀としての神道成立に遡りうる一貫した日本の政教関係概念が看取される。

パロールレベルでは、靖国神社側の論理、日本遺族会側の論理をはじめ、その時々々の政治的文脈の中で、政治的言論空間からインターネット上の書き込みに到るまでさまざまなディスコースが存在してきたし、今回政権与党となった民主党の政策では、近隣諸国との国際関係に配慮する観点から、無宗教の国立追悼施設の建設の推進が謳われている。

分析の視座を設定することで、よりラングレベルに存在する「価値緊張」を捕捉することで比較可能性に開かれた研究を可能にするための糸口を掴みたい。

新宗教のナシヨナリズムと敗戦の神義論

對馬 路人

新宗教が人をひきつけた魅力の一つとして人類救済や理想社会の実現への使命感を提供したことを挙げる事ができる。そして戦前・戦中期の新宗教の場合、それはしばしばナシヨナリスティックな性格を帯びていた。特に戦時期には愛国主義的な使命感が強調された。しかし敗戦という現実はどうした使命感を挫かせる。日本の新宗教の多くは、敗戦を前にして、その使命感の再編成を迫られたといえよう。愛国主義が強く、戦勝への

期待が大きかったところほど、その課題は大きかった。新宗教は敗戦の宗教的な意味をどう受け止め、戦後社会に向けてその使命感をどう再編成していったのか、戦後いち早く社会的に注目を集めた、璽宇と天照皇大神宮を事例に考えた。

両団体は街頭での忘我的なパフォーマンス、国民的ヒーローのリクルート、マッカーサーへの直訴などで注目され、敗戦のもたらした解放感や精神的混乱の象徴として見られた。しかしそれらの運動の内実を見る限り、国家の天皇制ナシヨナリズムの深刻な危機に触発され、新たな天皇制ビジョンを提起することで、使命感の再編成を目指した宗教運動と捉えるべきであろう。ただし両者の構想した世直しのビジョンやそれを追及する運動のスタイルには対照的ともいえる違いがあった。

璽宇（璽光尊）は戦時中はいくまで「唯一の忠臣」として天皇による世直しに力を振る存在と自らを位置づけてきた。しかし敗戦など社会的危機の昂進にもかかわらず、そうした訴えかけは容れられず、次第に現皇室や旧来の政治指導者への幻滅が深まっていった。ただしそれはかえって、世直しは自分たちが主体になるという自己使命感を高める結果をもたらした。璽宇は皇居とされ、璽光尊は「天子の代行」となり、更に「天子」になった。また、マッカーサーへの働きかけに見られるように、日本の指導層への幻滅から、外国人への期待が高まるなど、自民族中心の考えはむしろ相対化されていった。

ただし働きかけの対象は権威者や要人に絞るなど、一貫して上からの世直しを志向した。またその内部では宮中を模した儀礼秩序が定められ、璽光尊は御簾の奥に鎮座し、臣下の参内を